

《研究報告》

## 成人看護学実習における＜選択実習＞の学び

葛 西 智賀子<sup>1)</sup>, 岩 月 すみ江<sup>2)</sup>

**要旨:** 本研究の目的は、成人看護学実習における＜選択実習＞での学生の学びを明らかにすることである。＜選択実習＞は①血液透析室実習②土曜日・夜間診療実習③健康教育実習④ボランティア活動参加⑤闘病者・中途障害者などによる講演参加⑥大学や施設が主催する公開講座参加⑦看護系学会参加の7項目を設定した。学生64名を対象とし、①～④は実習項目ごとに、また、実習内容の類似性から⑤～⑦はまとめて、それぞれの実習記録から学生が学んだこと表現している文を抽出して、類似性に沿って集めカテゴリー化した。その結果、①血液透析室実習では【透析患者の生活の理解】など5カテゴリー、②土曜日・夜間診療実習では【土曜・夜間診療の役割】【患者の特徴】など4カテゴリー、③健康教育実習では【地域での健康教育の意義】などの3カテゴリー、④ボランティア活動参加では、【バリアフリーの必要性】など5カテゴリーが生成された。また、⑤闘病者・中途障害者などによる講演参加⑥大学や施設が主催する公開講座参加⑦看護系学会参加では、【様々な知識の獲得と認識の変化】などの4カテゴリーが生された。これらの結果から、＜選択実習＞は学生自らが看護者としてのあり方を考え問題意識を持つ機会となっていたが、＜選択実習＞のねらいであった成人期にある人の対象理解を深めることに効果があったのは、②土曜日・夜間診療実習のみであり、オリエンテーションの充実をはじめとする、＜選択実習＞における学習支援方法の検討と対象の精選が課題となった。

**キーワード:** 成人看護学実習, 選択実習, 学び, 対象理解

### はじめに

A看護系短期大学の成人看護学実習は、1人の学生が1人の成人患者を受け持つ看護を行う実習方法をとっていた。しかし、入院患者の高齢化により成人期の患者を受け持つ機会が減少している。そのため、実習グループ5～6人の学生全員が老年期にある患者を受け持つことも少なくなく、従来の実習方法では、成人看護学における看護の対象を理解するには限界が生じるようになってきた。

そこで、16年度の成人看護学実習は、学習機会を拡充するため、①血液透析室実習②土曜日・夜間診療実習③健康教育実習④ボランティア活動参加⑤闘病者・中途障害者などによる講演参加⑥大学や施設が主催する公開講座参加⑦看護系学会参加の7項目を設定し、そのうち4項目を学生自ら選択する＜選択実習＞を導入した。

入した。

本研究は、基礎教育課程の看護学生が、成人看護学の対象となる人とその人の生活の理解を深めるために導入した＜選択実習＞で学んだことを明らかにすることが目的である。

### ＜選択実習＞の概要

#### 1. 背景

A看護系短期大学の成人看護学実習の目的は、「あらゆる成人期にある対象の特徴を理解し、各健康レベルに応じた看護に必要な知識・技術・態度を習得すること」である。成人看護学実習は、成人看護学Ⅰ（4単位）と成人看護学実習Ⅱ（4単位）で構成されていた。成人看護学実習Ⅰでは、慢性期・回復期・終末期にある成人期にある患者への、また、成人看護学実習Ⅱで

1) 弘前学院大学看護学部 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL: 0172-31-7163 (DIN), FAX: 0172-31-7101, E-mail: kasai-36hirogaaku-u.ac.jp

2) 飯田女子短期大学看護学科

は、急性期（主に周手術期）にある成人患者への看護実践を通して看護を学ぶ内容であった。しかし、入院患者の高齢化により成人期にある人の理解が不十分な傾向が見られるようになり、また、在院日数短縮により4単位続けて1人の患者を受け持つことが困難な傾向が強くなったため、16年度から、成人看護学実習Ⅱを3単位に短縮し、残る1単位に＜選択実習＞の36時間と実習前の演習を位置づけた。

## 2. ＜選択実習＞の項目

成人期にある人がいる機会あるいは成人期にある人の理解が可能になる機会と考え、以下の7項目を設定した。7項目のうち、①～③から1項目を必須として、①～⑥からは3項目、および、A看護系短期大学の地理的制約を考慮して④～⑦から1項目を選択し、計4項目の実習をすることとした。なお、1項目は9時間とした（表1）。

- ① 血液透析室実習
- ② 土曜日・夜間診療実習
- ③ 健康教育実習
- ④ ボランティア活動参加
- ⑤ 闘病者・中途障害者などによる講演参加
- ⑥ 大学や施設が主催する公開講座参加
- ⑦ 看護系学会参加

## 3. ＜選択実習＞のオリエンテーション

すべての各論実習が開始される前に行われる成人看護学実習のオリエンテーションの一部として行った。成人患者を受け持つ機会が減少していることを補充するためという＜選択実習＞の目的と、各実習項目の概要や特徴、実習内容・方法、選択方法について説明した。また、＜選択実習＞の実習記録は、実習内容と見学（参加）しての感想・考察の2項目を記載するA4判1枚とし、出席の確認と授業評価に使用することを説明した。

事前に各実習内容に関する情報収集の方法を提示し、オリエンテーション後から実習期間中、随時、ボランティア募集、学会や講演会などの情報提供を行った。

## 4. 実習期間

成人看護学実習のオリエンテーションを行った4月中旬からすべての各論実習が終了する11月下旬までと

した。なお、この実習期間は、卒業論文作成期間と重なっているが、各グループ1週間から2週間の実習のない期間がある。

## 研 究 方 法

### 1. 対象

調査対象者は、A看護系短期大学看護学科3年次の成人看護学実習として新たに導入した＜選択実習＞を履修した64名である。分析データは、① 血液透析室実習、② 土曜日・夜間診療実習、③ 健康教育実習、④ ボランティア活動参加、⑤ 闘病者・中途障害者などによる講演参加、⑥ 大学や施設が主催する公開講座参加、⑦ 看護系学会参加、の実習記録256枚である。

### 2. 分析方法

- 1) ① 血液透析室実習 ② 土曜日・夜間診療実習 ③ 健康教育実習 ④ ボランティア活動参加

それぞれの実習ごとに、実習記録の感想・考察の欄より、気づき・感想・考察が記述されている意味がわかる最小限の文を抽出した。次に、記述内容により同類のものをグループ化しサブカテゴリーとした。さらに、各サブカテゴリーの類似性に沿ってカテゴリー化して名称をつけた。

- 2) ⑤ 闘病者・中途障害者などによる講演参加 ⑥ 大学や施設が主催する公開講座参加 ⑦ 看護系学会参加

実習内容の類似性から、3つの実習項目をまとめて1)と同様に分析した。

信頼性・妥当性を確保するために、文章の抽出は、実習項目ごとに研究者1名を含む成人看護学実習担当教員3名以上で一致したものとした。カテゴリー化は、研究者2名で一致したものを採用した。

### 3. 倫理的配慮

＜選択実習＞のオリエンテーション時に、提出された実習記録は出席確認と授業評価に使用し、その結果は個人が特定されないように公表予定であることを口頭で説明した。また、公表の際には、授業評価の資料であるために、所属教育機関や学年が特定されるリスクがあることを説明し、同意を得た。

## 結 果

学生64名、のべ256名、256枚の実習記録から744文が抽出された。各実習を選択した学生数（のべ人数）は、①血液透析室実習 24名、②土曜日・夜間診療実習 23名、③健康教育実習 53名、④ボランティア活動参加 104名、⑤闘病者・中途障害者などによる講演参加⑥大学や施設が主催する公開講座参加⑦看護系学会参加 52名で、一人平均4項目の実習を選択していた。

以下、それぞれの分析結果を述べる。

### 1. ① 血液透析室実習

抽出された145文から、18サブカテゴリー、5カテゴリーが生成された（表2）。

最も生成数が多いカテゴリーは【透析患者の生活の理解】で、＜患者は透析を受けることによって体調の変化や生活制限があり苦痛を感じている＞＜自己管理が大変である＞＜家族の支援を得ながら生活している＞＜役割を持って生活している＞の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

次に生成数が多かったカテゴリーは【透析医療の実際】で、＜その日の患者の体重や状態に合わせて除水量を設定している＞＜定期的に患者の状態を観察している＞＜機械の準備や操作を正確に行っている＞＜シャントを保護している＞＜透析終了後も観察している＞の5つのサブカテゴリーから構成されていた。

また、透析医療での【看護師の役割と支援の実際】は、＜患者との関係を築く＞＜透析中の患者への配慮をしていた＞＜看護師（医療者）は患者の生活制限と自己管理と一緒に取り組む必要がある＞＜自己管理が継続できるように支援することが大切である＞の4つのサブカテゴリー、【透析を受けている患者像】は、＜透析に対して複雑な思いを抱えている＞＜透析を受け入れるのは困難であった＞＜自分の病気について勉強していて知識を持っている＞の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

さらに、医療機器を目の当たりにしたり、シャントに触れる、シャント音を聴取する、穿刺の場面などを見学することによって、机上の学習で抱いた＜イメージと実際が結びついた＞体験や、学習している自分よりはるかに知識を持っている患者と接し、＜もっと学習しなければならないと感じ＞ていた。

学生は、個々の患者にとって体重測定がどのような意味をなしているかを考え、学生は机上で学習した知識をもとに、透析医療の実際を見学することで患者個々の状態に合わせた透析医療の必要性を考えていた。また、透析装置の複雑さや、体外に血液が出て行くことによる身体的侵襲を感じ取り、さらに、実際の医療者の動きなどから、透析治療中の患者の安全を確保する必要性を学んでいた。

また、医療者の接し方や患者の言動などから、透析患者の障害受容過程や患者が療養生活を維持させていくために必要な医療者としての態度、コミュニケーション、医療者と患者の関係性などの必要性を考えていた。

学生は、透析患者とのコミュニケーションを通じて主に、人工透析を必要とする慢性疾患を抱えた患者が、日々生活していく上での困難さを、特に食事・水分の制限に関することを学んでいる。また、それを継続させていくことの困難さ、自己管理の大変さなど、身体的・精神的・社会的に様々な制限の中で生活しているということを捉えていた。

さらに、学生は、患者の言動から、患者が透析を受容するまでの大変さや時間の関係、受容過程において何が大切なのか、様々な不安などを感じ取っていた。

### 2. ② 土曜日・夜間診療実習

抽出された90文から13サブカテゴリー、4カテゴリーが生成された（表3）。

【土曜・夜間診療の役割】は最も生成数が多く、＜生活スタイルを変えずに済む＞＜安心できる＞＜悪化を防ぐ＞の3つのサブカテゴリーで構成されていた。次に多かったのは、土曜・夜間診療を利用している【患者の特徴】で、＜仕事を持っている＞＜自分の健康に関心を持っている＞の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

また、【病気を持ちながら生活することの大変さ】は、＜仕事をしながらの通院は大変である＞＜セルフケアが大変である＞＜サポートが必要である＞＜経済的負担が大きい＞の4つのサブカテゴリーで構成されていた。さらに、【医療者の役割】として、＜生活を考慮した関わりをする＞＜時間のない人にあわせた対応をする＞＜温かい雰囲気づくりをする＞＜待ち時間に配慮する＞の4つのサブカテゴリーが生成されていた。

学生は、成人期にある人の特徴として、自分と同じ学生が学業を優先していること、または、親であり家族の中心的存在で仕事を持ち職場での役割が大きいことを捉えられていた。また、仕事を優先し、仕事、家庭、趣味、その他の人間関係が重要であり、それを維持するために忙しいことを捉えていた。また、そのような特徴を持つ成人患者が、通院や病気のセルフケアなど病気を持ちながら生活する大変さを実感していた。そのことから、サポートの必要性や医療提供システムとしての土曜・夜間診療の必要性やその役割を考えることができていた。また、学生が想像していた以上に、患者が医療や健康に関心を持ち知識も持っていることも捉えられていた。

### 3. ③ 健康教育実習

抽出された113文は、11サブカテゴリー、3カテゴリーに集約された(表4)。

【地域での健康教育の意義】は、＜コミュニケーションの場になっている＞＜主体的・効果的に取り組むことができる＞＜楽しみや生きがいになっている＞＜健康の保持や疾患の早期発見ができる＞＜健康への関心を促す＞＜安心して生活することにつながっている＞の6つのサブカテゴリーで構成され、生成数は抽出文の半分以上を占めた。

次に生成数が多かったのは【参加者の特徴】で、＜健康に関心がある＞＜お互いを気遣う関係である＞＜高齢で今後に不安を持っている＞の3つのサブカテゴリーで構成され、生成数は抽出された文の1/3に及んだ。また、【生活環境】には、学生が出向いた健康教育が行われている地域が＜病院から遠い＞＜恵まれた自然環境である＞の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

健康教育実習で学生は、地域で暮らす人が健康教育に参加して健康に対する学習や健康維持をするだけでなく、近隣に住む人々のコミュニケーションの場となりお互いに助け合いながら生活していることを学んでいた。また、学生は参加者の特徴として、高齢者が今後不安を持ちながらも健康に気をつけ近隣とのつながりを持って生活していることを捉えていた。

### 4. ④ ボランティア活動参加

学生が参加したボランティア活動は、ウォーキング大会(45名)、リハビリテーション病院の花見(5名)、

車椅子バスケット(22名)、障害者・老人施設(15名)、市民検診(5名)、外国人検診(3名)、障害児の家庭での機能訓練(2名)、失語症の会(2名)、学童保育のプール遠足、ディサービス、共同作業所、福祉・健康祭り、外来診療の補助(各1名)であった。

これらのボランティア活動に参加した学生の実習記録から280文が抽出され、17サブカテゴリーから5カテゴリーが生成された(表5)。

【バリアフリーの必要性】は、＜障害者への危険や支障が生じている＞＜ノーマライゼーションを推進する必要がある＞＜ノーマライゼーションの実際を知った＞＜介助者の負担が生じている＞＜障害を持って生活するには様々な支援が必要である＞の5つのサブカテゴリーから構成されており、最も生成数が多かった。

次に生成数が多かった【障害者や高齢者が参加している催しや活動の意義】は、＜生きる糧としての場になっている＞＜社会交流を持つ場になっている＞の2つのサブカテゴリーに、【障害を持つ人への配慮】も、＜援助の必要性和具体的な方法を知る＞＜望ましい援助像＞の2つのサブカテゴリーに集約された。

また、【障害の認識とその変化】は、＜障害者と健常者には相互関係がある＞＜障害者に対する偏見の認識＞＜健常者としての自分の振り返り＞＜介助を受ける人の理解＞は4つのサブカテゴリーから構成されていた。

さらに、参加した市民検診と外国人検診の【検診の意義と受診者の特徴】は、＜地域住民にとって健康を考える機会となっている＞＜市民検診を受けている人は様々な年齢層で高血圧の人が多い＞＜地域には異国での生活に慣れていない人がいる＞＜地域で暮らす外国人には健康を守りにくい状況がある＞の4つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は、ボランティア活動に参加して、障害者とのコミュニケーションを通じて、また、障害者の介助を行うことによって、今まで自分が意識していなかった自分自身にある障害者へ偏見を意識し、自分を振り返り、ノーマライゼーションが実際どのように行われているのかを知り、また、障害者の視点で道や設備の不備を実感し、ノーマライゼーションの必要性を考えていた。地域や施設で行われている催しやボランティアが提供している活動が、障害者にとってどのような意味があるのか、参加者の言動から捉え、援助者としてのあり方を考え具体的な援助方法を学んでいた。

## 5. ⑤ 闘病者・中途障害者などによる講演参加 ⑥ 大学や施設が主催する公開講座参加 ⑦ 看護系学会参加

学生が参加した講演・公開講座・学会の数は18であった(表6)。

⑤ 闘病者・中途障害者などによる講演に参加した学生は5名で、「全国失語症患者の講演会」(4名)と「失語症患者の定例会」(1名)であった。

⑥ 大学・施設が主催する公開講座に参加したのは42名で、学生が参加した講演・公開講座の内容は多岐に渡っていたが、「高齢者虐待－エイジズム－」(24名)、「地域づくり活動におけるパートナーシップの意義」(4名)、「食生活と健康の関わりを考える」(3名)が参加者が多い上位3の公開講座で、この実習を選択した学生の6割が参加していた。

また、⑦ 看護系学会参加は5名で、「日本難病看護学会」(3名)、「日本看護学教育学会」(1名)、「日本心理学会公開シンポジウム」(1名)であった。

抽出された116文から、11のサブカテゴリー、4のカテゴリーが生成された(表7)。

【様々な知識の獲得と認識の変化】は、＜新たな知識を得た＞＜認識を新たにしたり＞＜考えが変わった＞＜学ぶ機会・学びを広げる動機付けになった＞の4つのサブカテゴリーから生成され、抽出文の6割を占めた。次に生成数が多かったカテゴリーは【医療・看護のあり方】と【看護者としての自分の方向性】で、それぞれ＜望ましい医療のあり方を考える＞＜望ましい看護のあり方を考える＞と＜看護職としての自分のあり方を考える＞＜対象理解を深めたい＞の2つのカテゴリーで構成されていた。また、【参加者の理解】は＜参加者は主体的な存在である＞＜家族や同病者が助け合っている＞の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は、講演・公開講座・学会に参加によって、学校や施設以外の学びの場を得て、新しい知識を得たり医療現場で起こっている様々な問題を知ることによって、認識を新たにしたり、医療や看護のあり方に示唆を得、自分自身や看護者としての自分を振り返り、看護者として目指す方向を見出していた。また、講演・公開講座・学会の講演者や参加者が自分や家族の病気や健康に不安を持っていることや、積極的に知識を得ようとしている姿勢を捉えていた。

## 考 察

＜選択実習＞において、学生は、実習の場や提供されている医療や看護の内容が違っていても、自分の考える望ましい医療や看護について考え、自分を振り返り、目指すべき看護者の姿を描いていた。松山ら(2003)は、自ら看護を思考出来る専門職を育成するためには、自らが問題意識を持つ機会を提供することが重要(松山ら, 2003)であると述べている。＜選択実習＞は、学生自らが看護者として問題意識を持つ機会となっていたと考えられる。しかし、＜選択実習＞のねらいであった、“成人看護学の対象となる人”と“その人の生活”の理解に関しては、ねらいに相応しているとは言いがたい。

以下に、成人看護学実習における＜選択実習＞の学びから、＜選択実習＞の実習形態と、成人看護学の対象となる人とその人の生活の理解が乏しかった要因について検討する。

### 1. ＜選択実習＞の実習形態

＜選択実習＞では、成人期にある対象を求めて学生が主体的に学びの場を選択できるように、学習機会として7項目を設定した。しかし、⑤闘病者・中途障害者などによる講演参加⑥大学や施設が主催する公開講座参加⑦看護系学会参加で学生が参加したものは、「高齢者虐待－エイジズム」に見られるように、成人看護学実習の一部であることを加味していないテーマが含まれ、その参加数も多かった。この要因は、学生が選択した実習項目数が4項目で、履修の必要項目と一致しており学生は実習内容やテーマを選択するよりも実習項目数を満たすことで精一杯になっていると考えられる。＜選択実習＞の実習期間が各論実習と卒業論文作成と重なっていることから、学生にとっては、情報提供があっても参加するテーマを吟味できない、参加したいテーマがあっても日程が合わないなど、学生の主体性が発揮しにくい状況であったと考えられる。学生が主体的に学びの場を選択できるようにするためには、実習期間を成人看護学概論を履修した後から各論実習開始までに設定するなど、カリキュラムの改正を視野に入れた実習期間の再考が求められる。

### 2. “成人看護学の対象となる人”と“その人の生活”の理解が乏しかった要因

成人看護学では、看護の対象となる人を「社会的役割を担って生活している人」として捉え、その人の生活に着目する必要があるが、そのような内容の記述が見られたのは①血液透析室実習での【透析患者の生活の理解】のサブカテゴリー＜役割を持って生活している＞と、②土曜・夜間診療実習での【受診者の特徴】のサブカテゴリー＜仕事を持っている＞、【病気を持ちながら生活することの大変さ】のサブカテゴリー＜仕事をしながらの通院は大変である＞のみで、総抽出数744のうちわずか26(3.5%)であった。

佐藤(2001)は、「成人看護学概論や成人看護方法などの講義の時点から“人”に注目できるような授業展開を心かけているにもかかわらず、実習において学生が患者を“生活する人”というとらえ方が弱いように感じている」と述べている。＜選択実習＞の各実習項目では、医療の実際や看護・援助に関する記述が多くを占めた。このことは、佐藤が述べているように、臨地実習での学生の関心は、患者の疾患や疾患による患者の状態に向けられる傾向にあることを示し、成人看護学の対象となる人に関する記述が少なかった理由のひとつと考える。

また、“人”に関する記述は全実習項目に見られたが、患者や参加者・利用者を、疾患を持つ人や参加・利用している人としての特徴に関しての記述であった。

疾患を持つ人や参加・利用している人を通して“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”に関する記述がみられた実習項目は、①血液透析室実習（参加人数24名、抽出数2）と②土曜・夜間診療実習（参加数23名、抽出数24）のみであった。

島村ら(1999)は、学生は、「現象を受動的に受け取る傾向にあり」、「生活体験の少なさから社会的視野が乏しく社会的側面の理解が困難ではないか」、と述べている。学生は、患者・利用者・参加者に表面化している障害者や疾患を持っている人として特徴は捉えることはできても、社会的側面に特徴を持つ“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”に視点を持つことができなかったと考えられる。①血液透析室実習と②土曜・夜間診療実習に、“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”に関する記述が見られたのは、関わった患者が成人期にあり、身体的・精神的側面だけではなく、関わった患者から直接的に社会的側面の情報も得ることが可能であったためだと考える。

学生の“人”や“その人の生活”の理解が、参加した実習の参加者・利用者・患者の表面的な特徴に留まり、成人看護学における対象の“人”や“その人の生活”に至らなかった要因は、＜選択実習＞の目的やねらいが十分に学生に理解されていなかったことが考えられる。学生が、表面化している現象を受動的に受け取る傾向があり、また、社会的側面の理解が困難であるならば、＜選択実習＞での患者や参加者を通して“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”の理解は難しく、それを補う教育方法が必要であろう。＜選択実習＞のオリエンテーションでは、成人期にある対象を求めるための実習機会の拡大と説明したが、本研究の結果から、実習機会の拡大のねらいを焦点化して説明する必要があった。

田村(2003)は、「学びは結果だけではなくプロセスである」と述べている。学びをプロセスと捉えるならば、学生の学習支援は、オリエンテーションのみならず、教員が各実習の場で学生が学んでいることを把握し対象理解の視点を示唆し、学生が体験している現象を深く掘り下げて考えることを助け、共に各実習後に振り返りを促す場の設定が必要であろう。すなわち、今回の＜選択実習＞においては、実習記録も、“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”に関する記述を求めて、患者や参加者・利用者を通して、“成人看護学の対象となる人”や“その人の生活”の想起を促し、また、実習後に、個々の学びを引き出し、学生がそれぞれの学びを共有する機会が必要であったと考える。

### 3. “成人看護学の対象となる人”と“その人の生活”を理解するための学習機会の拡充への示唆

臨地実習での学生の関心が患者の疾患や疾患による患者の状態に向けられ、表面化している現象を受動的に受け取る傾向があり、社会的側面の理解が困難であると学生を理解するならば、“成人看護学の対象となる人”と“その人の生活”を理解するためには、対象者が成人期にあることが重要であると考えられる。

成人期にある対象者を求めるには、土曜・夜間診療のほかに企業の健康管理室や夜間の血液透析室実習が考えられる。松山ら(2003)は、「利用者に付き添うことで、看護の対象がそのような体験をし、どう思い、どう感じているかを素直に受けとめ、その人があるがままに捉えることができた」と述べている。これら企

業の健康管理室や夜間の血液透析室での実習においては、あくまでも患者や利用者に付き添うという実習方法で、その人の立場からその人やその人の生活を学ぶことが重要であると考ええる。

#### 4. 本研究の限界

本研究の結果は学生の学びが十分に反映されているとは言いがたい実習記録から導き出されたものであることが、本研究の限界である。

#### お わ り に

本研究により、改めて対象者の設定と実習オリエンテーションの重要性を知ることとなった。成人看護学において成人期にある人の対象理解は重要であり、看護学実習が知識と実践の統合を目的とするならば、学習機会としての臨地実習の役割は大きい。今後は、本研究の結果を踏まえて、オリエンテーションの充実をはじめとして＜選択実習＞における学生の学習支援を再考し、実習項目を精選すると共に、企業の健康管理室や夜間透析室での実習の可能性を検討していきたい。

#### 謝 辞

本研究に協力してくださいましたA短期大学看護学科の3年生のみなさま、また分析過程にご協力くださいましたA短期大学看護学科成人看護学担当の教員の方々に感謝申し上げます。

なお、本研究は、第31回日本看護研究学会学術集会で「成人看護学実習における＜選択実習＞の評価」という表題で発表したものを、データを追加して再分析したものです。

#### 文 献

- 1) 香春知永, 田代順子, 及川郁子, 他(2005), ヘルスボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方, 聖路加看護学会誌, 9(1), 11-18.
- 2) 松山洋子, 黒江ゆり子, 松下光子, 他(2003), 外来診療利用者への付き添い体験からの学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1), 62-68.
- 3) 佐藤まゆみ(2001), 成人看護学実習における現状と課題—周手術期患者の看護実習より, Quality Nursing, 7(3), 243-246.
- 4) 島村美穂子, 鳴海喜代子, 渋谷えり子, 他(2000), 看護学生の慢性期疾患患者理解の傾向について(第1報) 腎センター実習における実習記録の分析から, 埼玉県立短期大学部紀要1号, 37-45.
- 5) 田村正枝(2003), 対話で作る看護—ともに成長しつづけるために—, 日本看護学教育学会誌, 13(29), 45-52.

表1. 各実習の概要

実習項目	実 習 方 法
①血液透析室実習	一人の患者に付き添い、その患者に提供されている医療を見学する。
②土曜・夜間診療実習	一人の患者に来院から帰宅するまでの間付き添い、その患者に提供されている医療を見学する。
③健康教育実習	施設が支援している健康教育に参加し、血圧測定、塩分測定など一部は実施する。
④ボランティア活動への参加	地域や施設などで行われている行事や催しにボランティアとして参加する。
⑤講演参加	闘病者や中途障害者など病気や障害をもちつつ社会生活を営む人の講演に参加する。
⑥公開講座参加	大学や病院で行われる公開講座に参加する。
⑦看護系学会参加	看護系の学会に参加する。





カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
看護師の役割と支援の実際 (24)	患者との関係を築く (8)	<p>コミュニケーションをとりながらの普段の生活について情報収集の重要性を感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんの心が自然と表出できる言葉がけや態度が必要であると感じました。</li> <li>・透析をしていている看護師さんにもきちんと応えていきたいと(患者が)話してくれた。</li> <li>・医師や看護師さんたちは本当に親切に(中略)何度も何度も話し合いの場をもつてくださって涙が出るほどうれしかったそうです。</li> <li>・(明るく振舞っていても辛いときがある) こういう気持ちも十分にわかった上で患者さんと接していかなければならないと実感した。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	2
	透析中の患者へ配慮をしていた (7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事は片手で食べられるように工夫されていた。</li> <li>・看護師さんと患者さんの雰囲気がとてもよくて患者さんも任せて安心されていました。</li> <li>・血管が細くて弱い患者の穿刺場面では患者さんの痛みについて気を遣っていた。</li> <li>・4時間を安全に過ごせるように環境を整える</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	6
	看護師(医療者)は患者の生活制限と自己管理に一緒に取り組む必要がある (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんと医療者がともに歩んでいけるような関係作りが必要だと思いました。</li> <li>・医療者側に任せきりの医療を提供するのではなく、患者さんと共に考えてその方に合わせたより良い生活が送れるように手助けするのが看護師の役割である。</li> <li>・一生透析を行っていく中で患者さんが「これだけはゆずれない」と言うところは、看護師と一緒に考えていって話していた。…患者さんが希望する生活を送っていけるようにサポートしてゆく、そういうことが大切になってくるんだと感じた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	7
	自己管理が継続できるように支援することが大切である (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・透析という一生付き合っていかなければならないものを背負った患者さんの不安を聞き、支えになることが大切だと思った。</li> <li>・看護師は根気強く患者さんと接していき生活スタイルを変えずに生活していけるようにサポートしている。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	5
透析を受けている患者像 (24)	透析に対して複雑な思いを抱えている (10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・透析をしているおかげで生きていられるし…透析をすることで普通の人と同じように生活することができる。</li> <li>・透析をしていない私には知ることができないほどの思いを抱えて生きているのだということを知りました…夢で見ることは山に行って湧き出てくる水をがぶがぶ飲んで…生きることへの辛さともなしさを患者さんは抱えている。</li> <li>・“こう明るく見えても辛いときがあるんだに”とおっしゃった言葉がとても胸に突き刺さった。</li> <li>・透析を行うまでになってしまったことに驚きや信じられないという気持ちを抱いていた。</li> <li>・最初シャントを受け入れることができなかったことや、…患者様にとって一番変ことは気持ちの面だと知りました。</li> <li>・シャントに対する複雑な思いを持っていることがうかがえました…、今でも針を刺す瞬間は怖くて見れないとおっしゃっていました。</li> <li>・話の中では透析のためにかかるお金の負担、これから先、脳や心臓に負担がかかって死ぬのではないかと…様々な不安を打ち明けてくれた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	10
	透析を受け入れるのは困難であった (9)	<p>最初は透析を行うことに抵抗があり、透析していることを知られなくなったり、血管を見られなくなったりした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その方は透析前、どんなことをされてしまうのかとか、これから自分はどうなってしまうのか本当に考えると恐ろしかったそうです。</li> <li>・透析する前は、できるなら透析はやりたくないという気持ちが強く、腎臓をこれ以上悪くしないようにという気持ちで生活していたそうだが、透析が始まってしまうと嫌だという気持ちはなくなった。</li> <li>・透析を始めるうちに、からだが軽くなったり、体調が良くなるので、時間が経つにつれて受容できた。</li> <li>・こんなことになってしまったと話していた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	2
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・その方は透析前、どんなことをされてしまうのかとか、これから自分はどうなってしまうのか本当に考えると恐ろしかったそうです。</li> <li>・透析する前は、できるなら透析はやりたくないという気持ちが強く、腎臓をこれ以上悪くしないようにという気持ちで生活していたそうだが、透析が始まってしまうと嫌だという気持ちはなくなった。</li> <li>・透析を始めるうちに、からだが軽くなったり、体調が良くなるので、時間が経つにつれて受容できた。</li> <li>・こんなことになってしまったと話していた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	7
	自分の病気について勉強していて知識を持っている (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の健康管理やからだの機能など詳しい知識を持って、健康への意識は高い。</li> <li>・自分の病気について勉強していて勉強してきたはずの私たちより詳しくかった。</li> <li>・患者さんの中には13年も透析を続けている人もいて、その方の知識はとても深く私たちの方が勉強になったくらいだった。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	5

表2. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
その他 (21)	イメージと実際が結びついた (17)	シャント部位が目で見ても拍動がわかり、実際に触れてみると本当にシャーシャーという拍動が伝わったり、聴診器で聴けたので驚いた。	4
		透析時に使用する針は太く驚いた、それを2本も腕に刺し、痛々しい。	3
		・授業では習っていたけれど、今日初めて実際に見ることができ、改めてそれを実感することができた。	10
		・シャントの血流はすごく大きな音で、ほかの血管では聞こえない音がしっかりと聞こえました。音がしっかりと聞こえるほどの血流量が必要なんだと実感しました。	
		・人工血管は本人の血管より硬く、拍動が感じられなかった。	
		・透析の機械のすごさに驚きました。機械だけではなくダイアライザーにも驚きました。 他	
	もっと学習しなければならぬと感じた(4)	今回患者さんと接してみて、まだまだ勉強不足だと思った。	3
		透析室の見学を通し、透析について関心も大きくなった。	1

表3. 結果 ②土曜日・夜間診療実習 参加人数のべ23名 抽出数 90文

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
土曜日・夜間診療の役割 (34)	生活スタイルを変えずに済む (17)	昼間病院に来られない人(仕事や学校に行っている人)にとってとても助かっている。	6
		仕事を持っている患者にとって、仕事に影響せず、職場にも気を使わずに受診できるため、時間にゆとりをもてることができるのではないか。	3
		土曜しか来院できない人にとって大切なもの(本当に助かる)。	3
		生活スタイルを崩ることなく診察が受けられる点でとても利用しやすい。	2
		・昼仕事にしている人にとって体調の崩れを早く治すことで働きやすくなる。 ・仕事に追われている人にとっては日曜日診察というものができればもっと通院しやすくなるのではないか。 他	3
	安心できる (9)	夜間診療があることで安心した生活を過ごすことができる。	5
		夜間診療を頼りに来る人も結構いて驚いた。	2
		・病院に来たことのある人でも夜間診療を知らない人がいる。もっと多くの方に知ってもらえると良い。 他	2
	悪化を防ぐ (8)	夕方から症状が出た人にとって(大切であり)必要である。	3
		・仕事が優先されがちな人たちが定期的に受診できることで自分の身体にも目を向けられるようになる。 ・土曜診察があることで仕事がある人は病気の早期発見・早期治療につながっている。 ・昼間仕事をしている人が夜間受診できることで無理することなく致命的とならない。 他	5
受診者の特徴 (22)	仕事を持っている (13)	昼間仕事をしていて受診困難な人が多い。	3
		仕事の関係上、平日遅くまで仕事があり土曜しか来院することができない人が多い。	2
		・仕事をしていると、他人との関係が大切であり成人期の人の生活調整を考えるときに仕事を切り離して考えることはできない。 ・成人期の人は、一家の大黒柱であり、家庭や職場での役割が大きく、健康は自分自身だけのものではない。 ・成人期の患者が多い。 ・男性が意外に多い。 ・仕事が終わってから来院し、終了後はゆっくりする暇もなく次の目的に向けて行動していたことから、成人期の方は仕事、家庭、趣味など全て行わなければならない忙しい。 ・具合が悪くても昼間は連れてきてくれる人がいないため家族の帰りを待って受診する人がいて、そんな利用の仕方もあることを知った。 他	8
		他	
	自分の健康に関心を持っている (9)	患者は医療者側が想像するよりはるかに医療について関心があり学習していて知識がある。	3
		それぞれの人が不安や悩みを抱えて来ている。	2
		・(○氏は) 病気を自己管理しながら家族のためにと仕事もこなす強い心を持っている。 ・(○氏は) 不安もあると思うが前向きで今自分に起こっていること受け入れた上で行動をとっている。 他	2

表3. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
病気をもちながら生活することの大変さ (19)	仕事をしながらの通院は大変である (11)	仕事を持つ成人期の方にとって病気をもちながら生活しセルフケアを行うのはとても大変なことである。	2
		病気を抱えながら生活していくことは大変である。	2
		・仕事をしながらの定期的通院は大切だが大変である。 ・(慢性疾患は)生活指導されても日常生活で仕事もしながら守っていくことは容易なことではない。 ・仕事をしている人は受診日の調整が大変である。 ・患者には仕事もありまた自分の病気のこともありと、私たちと比べようのないくらいの苦労や努力をなさっている。 ・親としての役割や職業人という役割を担いながら自分の身体のコントロールをしていかなければならないという難しさは想像を超えるものだろう。 ・男性は家族を養っていくために自分が病気だからと甘えることもできないと言うのが現状である。 他	7
		セルフケアが大変である (4)	2
	サポートが必要である (3)	知識があっても実際に生活していくことは難しい。 ・気をつけていると話していたがデータが悪くショックを受けていた患者より自己管理の難しさを改めて学んだ。 他	2
		・生活の中で制限がある人は家族の理解や協力が必要だ。 ・食事など家族に協力してもらわなければならない部分について協力が期待できない、あるいは気兼ねがある場合、必要性がわかっていたり実践したくてもできない状況がある。 他	3
	経済的負担が大きい (1)	治療代が、長期間通院している人にとっては負担が大きい。	1
医療者の役割 (15)	生活を考慮した関わりをする (6)	患者の通常の生活を基本としてその中に医療が関わっていくことが大切である。 ・その人の生活を知り、その人に必要なことを少しずつでもできるようにアドバイスしていくことが大切。 ・看護師は患者のやる気を引き出して一緒に調整できるような関わり方ができると良い。 他	2
		・入院患者と違い時間がないため要点をまとめて話や訴えをきかなければならない。 ・入院患者と違い時間がないためすばやい対応が必要だ。 他	4
	時間のない人に合わせた対応をする (4)	・患者全体を捉えるような温かい感じがあるから、仕事の帰りの疲れている中でも継続して通院することが可能になっているのではないか。 ・患者の気持ちを配慮し気持ちよく安心して診察が受けられるような雰囲気を積極的に作っていかなければならない。 ・スタッフが対応良く話しやすい感じが伝わってきて患者にとって来やすく温かい感じがする。 他	4
	待ち時間に配慮する (1)	待ち時間が長い間看護師からの説明も大切である。	1

表4. 結果 ③健康教育 実習 参加人数のべ53名 抽出数 113文

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
地域での健康教育の意義 (69)	コミュニケーションの場になっている (21)	高齢者にとって外出の機会であり大切な交流の場になっている。	8
		何かあったときに相談したり助け合える関係を築いている。	4
		公民館や役場で行うことで気を使うことなく気軽に集まれる。	2
		情報や意見交換の場になっている。	2
		・体験談などを話しお互いに共有できる。 ・悩みを交換しあう大切な時間である。 ・家で畑仕事をしているので近所の人ともなかなか顔を合わせられない。 他	5
	主体的・効果的に取り組むことができる (19)	健康管理も一緒に勉強していくことで実践できる。	12
		・誰かと一緒に励ましあいながらであればできることの力が効果的に働いている取り組みである。 ・受身ではなく積極的に参加している。 ・仲間がいて刺激しあうことで取り組みやすい。 ・自分たちで主体的に会を進めることができる。 他	7
	楽しみや生きがいになっている (13)	楽しみや生きがいになっている。	3
		健康になるための知識を補っている。	2
		仲間がいることで班員の心の支えになっている。	2
		・健康のために何かしようとしていることが生きがいになっている。 ・話したり笑ったり声を出すと元気になる。 ・一人一人が生き生きしている。 他	6
	健康の保持や疾患の早期発見ができる (8)	地域住民の健康維持・増進・疾病の早期発見に大きな役割を果たしている。	4
		健康カードでその変化を見ることができている。	3
		定期的に検査することで病気の早期発見になる。	1
	健康への関心を促す (6)	主体的に健康について考えることが意欲の向上につながる。	2
		・自分の身体と向き合う機会があると健康に対する意識が違う。 ・地域住民（特に高齢者）の健康意識を高める機会になっている。 他	4
	安心して生活することにつながっている (2)	・安心して生活できることにつながっている。 他	2
参加者の特徴 (40)	健康に関心がある (19)	地域の方々の健康への関心を知ることができた。	4
		健康を維持していくため考えて行動している。	3
		家族の健康も気にしているいろいろな情報を得ていた。	3
		日頃から健康を意識しながら生活している。	2
		食生活を振り返り自分の課題を見つけていた。	2
		・自分の身体について知識がたくさんあった。 ・自分の身体に関心を持っている。 ・血圧は毎回実施しているので自分の値を知っていて変動の理解をしていた。 他	5
	お互いを気遣う関係である (14)	介護に関連した話題で情報交換をしており共有できる関係は良い。	4
		友達ができることで生き生きしている。	2
		・お互いの健康にも気を使っている。 ・介護している人に労いがあった。 ・安否を確認できる。 ・一人一人が受け入れられている。 他	8
	高齢で今後に不安を持っている (7)	・「自分はもう世話をされる身」、「あとは死を待つだけだ」など、老人の思っていることを聞くことができた。 ・今後に不安を持っていた。 ・参加者は若くても50歳代であった。 ・働きすぎて自分のからだがいなくなってしまうという生活や苦悩を知ることができた。 他	7
生活環境 (4)	病院から遠い (2)	近くに病院もなく病院に行く事は容易ではない。	2
	恵まれた自然環境である (2)	山がすごく近くに感じた。	1
		野菜や山菜に恵まれている。	1

表5. 結果 ④ボランティアへ活動への参加 参加人数 のべ104名 抽出数 280文

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
バリアフリーの必要性の認識 (110)	障害者への危険や支障が生じている (56)	少しの段差も車椅子などには不自由である。	12
		斜めや凸凹した道路は車椅子の振動が大きい。	10
		軽い傾斜の道も車椅子のスピードが出てしまう。	5
		道路が舗装されていないので車椅子の振動が大きく苦痛である。	3
		歩道幅も車椅子が通ると狭い。	3
		道路の小さな溝に車椅子の車輪が何度もはまってしまう。	3
		平らな道路に見えても車椅子移動はしにくい。	2
		信号機のあるところは必ず小さな段差があり車椅子は乗り越えづらい。	2
		坂が多い街で車椅子生活は大変で負担である。	2
		レンガ歩道は車椅子の人に振動を与える。	2
		・道路のひびが車椅子の人に衝撃を与えた。 ・傾斜や段差で車椅子のバランスが崩れてしまう。 ・石畳の道路が多く障害者には不便。 ・全盲の方には誰かの補助がないと散歩できない道路である。 ・コンビニの引き戸が障害者には不便である。 ・障害者用のトイレが少ない。 ・障害者が一般の道を歩くには段差や石なども危険である。	12
		他	
	ノーマライゼーションを推進する必要がある (21)	障害者スポーツが身近に参加できる場が増えるとよい。	3
		地域のすべての人が安心して住みやすい町づくりを進めるべきである。	2
		障害者が社会進出する社会を作る必要がある。	2
		少数者の意見を排除しないでバリアフリーを実現して欲しい。	2
		・健常者も身体障害者も同じ社会の中で生活をしているノーマライゼーションが当たり前の社会を、街全体のバリアフリーについて考えていく必要がある。 ・幼い時からボランティアを通して障害を持つ人と接する機会を持つように社会全体で考えなければならない。 ・福祉ボランティアにもっと関心が持てる地域づくりが大切である。 ・地域で障害を持ち他者の助けが必要な人にボランティアが参入できる機会を与えることも医療者の役割である。 ・障害者と幼い頃から接することでノーマライゼーションの考え方が社会に広まるのではないか。 ・健常者は障害者に対して知識が足りないのではないか。	12
		他	
	ノーマライゼーションの実際を知った (17)	車椅子バスケットでは健常者も参加する。	6
		車椅子バスケットは障害の違いでルールを変え平等な参加の工夫し心のバリアフリーを可能にしている。	5
		・車椅子バスケットで使用した体育館は障害者の人が使いやすいような整備があった。 ・車椅子バスケットでは障害の違いや相手を知り共存していた。 ・車椅子バスケットは障害者も不自由のない人も一緒になってできることがすばらしい。	6
		他	
	介助者の負担が生じている (9)	一般の道路で人が乗った車椅子は押しにくい。	3
		・段差・凸凹・歩道の道幅が狭いなどで聾啞者と並んで歩くのが大変である。 ・移動介助をする中で砂利道や芝生の上、急な坂道は介助も大変である	6
		他	
	障害を持って生活するには様々な支援が必要である (7)	・障害児を持ったとき母親は自分を責めたりした。 ・障害児を持つ家族にはボランティアの存在が大きい。 ・障害児を持つ親は様々な思いや努力をしている。 ・家族だけで障害児のリハビリを続けるのは限界がある。	7
		他	

表5. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
障害者や高齢者が参加している催しや活動の意義(68)	生きる糧としての場になっている (43)	笑顔で楽しそうにバスケットの時間を過ごしていた。	4
		脊椎損傷になってから車椅子バスケをするまでは家に閉じこもっていた。	3
		ハンディキャップを持つ人が授産施設で働いて自立を目指している。	3
		車椅子バスケの人が生きがいや趣味に打ち込む姿が輝いていた。	2
		障害を乗り越え生き生きとスポーツに取り組んでいた。	2
		生き生きとバスケをしていた。	2
		・ デイサービスが楽しみで、ほかの参加者に会うと元気が出ると言い楽しそうであった。 ・ 施設の開園際で入所者が中学生ボランティアにおごっており、感謝されて得意げであった。 ・ 発表する前は緊張していたが、発表後はホッとして笑顔が見られた。 ・ 車椅子バスケが生きがいへと繋がっている。 ・ 車椅子バスケでは自分自身と戦い自己を高めようとする姿がありすばらしかった。 ・ 社会復帰を目指すまでのことを話す人は自分自身に誇りを持っている。 ・ 行っている作業に誇りを持ち取り組んでいる姿は輝いていた。 ・ 生きがいを持つ障害者の笑顔は輝いていた。 ・ 障害者がウォーキング大会でいい顔をしており、久しぶりの笑顔だという。 ・ ウォーキング大会参加者の障害児童が元気一杯で冗談を言ったりして楽しそうであった。 ・ 車椅子バスケが社会に出て視野を広めるきっかけだという。 ・ パラリンピックの選手から車椅子バスケを教えてもらったのが楽しい生活のきっかけになったと話していた。 ・ 車椅子バスケに参加するようになってスポーツ以外でも積極性が出てきたと言う。 ・ (障害者にとって) 仕事をして色々な人と接しご飯を食べたりが楽しみになっている。 ・ 病院・施設の行事やレクリエーション活動は患者の楽しみ・活力となっている。 ・ リハビリに通いながら趣味や好きなことを持つことは大切である。 他	27
	社会と交流を持つ場になっている (25)	やまびこマーチは交流・障害を持つ方が外に出る機会となっている。	2
		失語症友の会が患者・家族の心のリハビリになる。	2
		施設の催しは施設を知ってもらう機会になっている。	2
		地域の人たちが障害者参加の福祉祭を企画や運営する姿から、地域の結束の強さを感じた。	2
		・ 家族以外の他者が障害児リハビリに参加することは刺激とコミュニケーションの場になっていた。 ・ リハビリに通うことはリハビリだけではなく社会交流になっている。 ・ ウォーキング大会はハンディキャップを持つ人・持たない人が身近に接する大会である。 ・ 車椅子バスケでは自己紹介をして交流が図られていた。 ・ 老後は趣味だけでなく他者との関わりも必要である。 ・ 自然の中で参加者と皆で食事をしたことが食事がおいしいと感じることへのきっかけになっていた。 ・ 施設の催し物が地域の交流の場になっていた。 ・ 車椅子バスケとは同じ目標を持つ仲間と触れ合う場になっている。 ・ 知的障害者の方が初対面なのにたくさん話してくれた。 他	17
	障害を持つ人への配慮(40)	脊椎損傷の人の夏や運動時は、霧をかけて体温コントロールしており、辛い状況にある。	7
		障害者と話をして言葉が理解しにくかったが聞いているうちに解ってきた。	2
		失語症の方が話すときはよく聞き、受け止めていくことが重要である。	2
		・ 全盲の方には段差やスロープの所では事前に教えたり、場所・物を伝える会話が必要である。 ・ 四肢麻痺の方が財布から小銭を出せない時は、断ってから手助けが必要である。 ・ 失語症の人と話すときは、ゆっくり余裕を持ち聴く態勢を整えないといけない。 ・ 耳が聞こえない人が周りの人が笑っていると何でわらっているのか解らないので不安。 ・ 他のボランティア参加者が体温が下がらないように、障害者の背中や腹部に新聞紙を入れていたことが印象に残る。 ・ 車椅子に長時間座る人は除圧クッションが必要である。 他	12

表5. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
	望ましい援助像(17)	看護師として手話・点字が必要だと思った。 ・外国語を覚えること以上に相手の立場になって考え接することが大切である。 ・個人にあった生活の様子や食事の取り方、日中の過ごし方を把握した対応が必要である。 ・いくら忙しくても笑顔を忘れない人間でありたい。 ・あいまいな返事や反応で患者を傷つけることがないようにしなければならない。 ・よい看護師とは…に対して障害者の方が「差別をしない人」と…。考えさせられた。 ・常に弱い人の立場になって気かけられる人間になりたい。 ・声かけの工夫で利用者の行動が変わり、大切である。 ・人に喜ばれることの喜びを大切にしたい。 他	2 15
障害の認識とその変化(34)	障害者と健常者には相互関係がある(11)	ボランティアで直接触れ合うことで自分も頑張らなくちゃと思える力を頂いた。 ・ボランティアとは何かお手伝いするという意識があり、参加してボランティアとはお互い学びあい補い合うことで一方的ではない。 ・失語症の人の辛さを乗り越えた自分として受け入れることができたことを知り、その人の強さを感じた。 ・ボランティアに参加して話題が見つからず苦しいのではと思っていたが、色々な人と接して話題に困らず成長した自分に気づいた。 ・共にゴールしたとき感謝された。 ・障害者のトイレ介助がうまくできなかったのに「ありがとう」といわれた。 他	2 9
	障害者に対する偏見の認識(9)	・障害という言葉に壁を感じ、手加減してパスしていたことに気づいた。 ・車椅子バスケットに参加するまではたいしたことないと思下し、差別の感情があった。 ・一緒に歩いた障害者の歩きが早く、先入観・偏見のようなものを抱いていた自分に気づいた。 ・障害者に偏見のようなものがあつたが、障害者は手助けを必要とする頻度が多いだけで基本的には何も変わらない。 ・ビールを飲んだり成人男性と同じだと聴くまでは、障害者という枠で一步引いていた。 他	9
	健常者としての自己の振り返り(9)	障害を持つ方にどう接していいか余計な心配をしていた自分。 ・相手の反応が怖くて自分の話に自身が持てずに引き気味に話したり、聞き流すままにしていた。 ・リハビリ交流から障害を持つ人が頑張っている様子から、自分に甘えがあり、頑張っている生活していないことに気づいた。 ・周りの人も自分の価値観と同じように物事を考えてしまっていた自分に反省。 ・車椅子バスケットに参加している人を見て、階段がきついと文句を言ったりする自分が恥ずかしくなった。 他	2 7
	介助を受ける人の理解(5)	・大丈夫ですかの声かけに、何も言わないでくれという表情をする。 ・介助に抵抗・羞恥心があり嫌がった。 ・車椅子に乗っていて周りで話をされると孤独感を感じる。 他	5
	検診の意義と受診者の特徴(28)	地域住民にとって健康を考える機会となっている(10) ・大丈夫ですかの声かけに、何も言わないでくれという表情をする。 ・介助に抵抗・羞恥心があり嫌がった。 ・車椅子に乗っていて周りで話をされると孤独感を感じる。 他	2 2 6
	検診を受けている人は様々な年齢層である(8)	市民検診を受ける人は病院受診の人よりも見た目が若かった。 市民検診を訪れた人は高血圧の人が多かった。 ・市民検診の対象は40歳以上の検診を受けない人、60～80歳代であった。 ・外来は20～80歳代という様々な年齢層の患者と接する。 他	2 2 4
	地域には異国での生活に慣れていない人がいる(6)	地域に住む外国人はブラジル人が多い。 外国人は気候の違いから風邪を引くなどの病気、異国生活を感じている。 地域で外国人学校がありそこで日本語を覚えている。 外国人の方々は一般検診では日本語が通じず、言語別問診票が準備されていた。 外国人に接するときは言葉が解らなくてもジェスチャーや表情で訴えるサインを見逃してはいけない。 外国人に対しても言葉の壁、費用の壁をなくし、疾病予防や早期発見が必要である。	3 2 1 2 1 1

表6. 結果 ⑤⑥⑦講演・公開講座・学会参加 (1) 参加人数 のべ52名  
学生が参加した講演・公開講座・学会数 18

	内 容	参加数
⑤講演 (5)	全国失語症患者の講演会	4
	失語症患者会の定例会	1
⑥公開講座 (42)	看護協会地方支部主催「高齢者虐待ーエイジズムー」	24
	B大学公開講座「地域活動におけるパートナーシップの意義」	4
	C大学公開講座「食生活と健康の関わりを考える」	3
	D大学公開講座「ナイチンゲールの考える環境と看護」	2
	E病院公開講座「肝硬変・肝がん・肝炎の治療」	1
	F病院公開講座「歯周病と糖尿病との関連」	1
	在宅ホスピス協会公開講座「スピリチュアル・ケア」	1
	G市民講座「ドメスティック・バイオレンス (DV) について」	2
	H市民講座「S県のがん医療を考える」	1
	I市民講座「骨粗しょう症・変形性膝関節症の治療、内視鏡下での手術について」	1
	J市民講座「見つめてみませんか? あなたの性と性」	1
	「いいお母さんの日のイベント」講演会	1
⑦学会 (5)	日本難病看護学会	3
	日本看護学教育学会	1
	日本心理学会公開シンポジウム	1

表7. 結果 ⑤⑥⑦講演・公開講座・学会参加 (2) 参加人数 のべ52名 抽出数 116文

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
様々な知識の獲得と認識の変化 (72)	新たな知識を得た (16)	(高齢者虐待は) 家族内の要因であり、施設内の要因もあり、私たちも気づかずにしてしまう可能性があることを知り、ショックを受けた。	4
		看護師や医療従事者も虐待している現実をしりショックを受けた。	3
		・ (高齢者を) 見下すような現象が実際に起こっており、定義付けられていることにショックを受けた。 ・ 子供の話を聞くという態度をとっていかないと、子供の「語り」の発達に重大な影響を及ぼしてしまうという点で、親が子供の話を聞く時には、一種の責任がつかまとう。 ・ さまざまな学校の実習内容や、それについて学生がどのように考えているのか知った。 ・ ナイチンゲールが100年前にすでにバリアフリーや在宅改修などの考えを取り入れていたことは、本当にすごい。 他	9
	認識を新たにした (16)	虐待と言うと小児について考えていたが高齢者虐待にも目を向けていかなければならない。	3
		ケアをする側は虐待だと思わなくてもケアされる側が虐待だと思えば虐待である。	2
		・ 今まで私たちはよけに手を出しすぎていたことに気づいた。 ・ 自分が思い込んでいんなものを見ていたことに恥ずかしさを覚えた。 ・ 身体障害者ではなく、チャレンジャーと呼ぶことで偏見もなくなり、平等であると感じることができる。 ・ (がん患者に対して) 自分の問題として捉えるには現実味がなく人事のようで、客観視している自分がいて非常に自己嫌悪に陥ります。 ・ どんなにやっても患者さんがよくならないと、私たちは患者さんの限界だと思いがちになると思います。でもそれは違っていて、私たちの方法が限界やひとつのこと (方法) にとらわれすぎているのかもしれない。 ・ 虐待は加害者の人間性の問題であると思っていたが、それだけでは解決しない問題であることに気付いた。 他	11
	考えが変わった (12)	それまで考えていた看護者主導のものではなく、看護者と住民が企画の段階から参加して、双方の働きかけによって成立している。	3
		・ びっくりしたことは、失語症の方々が進行運営していることだ。 ・ (失語症の患者が) 言葉を発するときに一生懸命になると声が大きく怒鳴った声になってしまうことを知った。 ・ これをきっかけに自分の考え方を変えたいと思った。すぐに諦めずいろいろなことにチャレンジしていけるように頑張れるようになりたい。 ・ 心身の機能の衰えという劣った面ばかり着目してしまうとエイジズムにつながるような考えを抱いてしまう。 ・ 常に高齢者を相手にする仕事をしていると、自分が虐待を行っていることさえ麻痺してわからなっている状態なのだ。 他	9



表7. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	記 述 内 容	記述数
	学ぶ機会・学びを広げる動機づけになった (6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会に出ることで、難病を抱えている方、それを支える家族と周囲の援助者の方々の現状を知ることができた。</li> <li>・患者・家族の方々のことを一番考えた、両者共に歩んでいけるような研究がしたい。</li> <li>・無知なことは患者さんを傷つけてしまうことがあるのもっと勉強しようと感じた。</li> </ul> <p>他</p>	6
	自分の考え方を振り返る (6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エイジズムや高齢者虐待はだれにでもあるような気がする。</li> <li>・気がつかないうちに高齢者に虐待と思われる行為をしているかもしれないので気をつけたいといけな。</li> <li>・相手は何もわからない、言ってもわかってもらえないと最初から思い込んでしまえば、伝わることも伝わらなくなる。</li> </ul> <p>他</p>	6
医療・看護のあり方 (19)	望ましい医療のあり方を考える (10)	単に元気な高齢者を増やすというだけではなく、地域住民同士や医療関係者との結びつきの場という役割も担っている。	2
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・退院したらそれで途切れてしまっではよりよい医療が提供できないがすこしづつ作っていくべきだと思う。</li> <li>・DVを受けている親を持つ子供たちの心の傷が少しでも癒えるように、子どもたちの心のケアも必要である。</li> <li>・世話をする側の虐待を行ってしまう要因を個人個人に対して把握し、その人たちへのケアや社会的なサポートによって虐待を減らすことが必要。</li> <li>・施設が、職員の処遇や労働環境を積極的に改善していく必要がある。</li> </ul> <p>他</p>	8
	望ましい看護のあり方を考える (9)	看護師として自己理解 (エイジズムの傾向はどうか、ストレスはないか)、高齢者やその家族を理解する側面、高齢者に関して幅広い知識・情報を持ち、高齢者の強みを見出してケアすることが大切。	4
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々気をつければ危険を回避できる可能性が高くなるとわかっていても、できないことが多いということは、人々の生活を手助けして健康への援助を行う看護でも同じ課題である。</li> <li>・社会参加したいという患者の方々の言葉は、とても大切で尊重しなければならない。</li> </ul> <p>他</p>	5
看護者としての自分の方向性 (19)	看護職としての自分のあり方を考える (14)	ストレスや疲労をためないような自分なりの方法を探し、心のゆとりが持てるようにしたい。	3
		人と接する上でも人のよいところを見るように心がけ、その人の生育歴、歴史を大切にし、一人の人間を様々な観点から見れるように心がけていきたい。	2
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護する私は、相手に介護されていると強く思わせたくないような態度・技術を見につけていきたい。</li> <li>・せめて辛い気持ちを感じ取れる看護師が受け持ちの人だといいなと思ったので、そんな看護師を目指そうと思いました。</li> <li>・寝かせきりにせず、環境にも充分に配慮し患者の回復力を増幅していきたい。</li> <li>・自分の行動や言動、いつも何気なくやっていることを思い出してみることが大切だと思う。</li> </ul> <p>他</p>	9
	対象理解を深めたい (5)	エイジズム解消のために理解を深めるとともに高齢者の個人個人に対して多様な見方をし、全体をしっかりと把握して接していけるようになりたい。	2
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手のことをよく知りよいところをたくさん見つけていくような関わり方が大切。</li> <li>・その人の今いる環境・価値観、その人の気持ちを理解しようという思いを常にもちたい。</li> </ul> <p>他</p>	3
参加者の理解 (9)	参加者は主体的な存在である (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALS 患者の方々は、難病を抱えながらも、積極的に社会参加されている。</li> <li>・(学会に ALS の患者さんも多く来場されていて) 自分の抱える病気について知りたいていることと、その熱意が伝わってきた。</li> <li>・自分の身体は自分で守る時代になり一般の人でも専門的な知識を学ぼうと努力している。</li> </ul> <p>他</p>	5
	家族や同病者が助け合っている (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きていくことの楽しみ、喜びを皆さんで分かち合っている。</li> <li>・糖尿病の方同士の意見交換をしており、お互いに知識を共有しながら助け合っている。</li> </ul> <p>他</p>	4

## EVALUATION OF NURSING STUDENT EDUCATION IN “OPTIONAL PRACTICES” FOR ADULT NURSING

Chikako KASAI<sup>1)</sup> and Sumie IWATSUKI<sup>2)</sup>

**Abstract** : The purpose of this study is to evaluate nursing student education in “optional practices” by examining student nurses’ experiences.

The following seven items were observed: 1) caring for patients in a hemodialysis center; 2) caring for outpatients on Saturday or at night; 3) providing health education in the community; 4) participating in volunteer activities; 5) listening to a talk by individuals who are coping with illness or disability; 6) participating in university extension courses or public programs hosted by medical care facilities; and 7) attending nursing-related academic conferences. Among 64 students, a total of 256 optional practice items were observed. As a result, each practice was categorized into 3-5 learning categories. These “optional practices” provided student nurses with the opportunity to consider the role of a nurse. All such optional practices were developed in order to improve student nurses’ understanding of adult patients and their lives; however, only item 2) caring for outpatients on Saturday or at night was observed to be effective.

This result indicates that we must focus on the process of supporting nursing student education by properly orienting the courses, and carefully selecting the course subjects.

**Key words** : clinical practicum of adult nursing, nursing students, “optional practices”

---

1 ) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University, Chikako Kasai, 20-7 Minorichou, Hirosaki, Aomori Pref., 036-8231, Japan  
TEL: 0172-31-7163, FAX: 0172-31-7101, E-mail: kasai-36@hirogaku-u.ac.jp

2 ) Iida Women's Junior College